第9回 3大学合同シンポジウム

地下鉄七隈線沿線　福岡歯科大学　中村学園大学　福岡大学

高齢化社会と健康

ー快適な生活を送るためにー

日時 平成25年11月3日(日) 13:30～

場所 福岡大学病院　福大メディカルホール

参加費 無料

第1部 各大学講師による講演

「お口の老化とうまく付き合うために ーお口の老化の個人差を理解するー」
福岡歯科大学 咬合修復学講座 准教授　松浦　尚志

「骨粗鬆症の正しい理解と予防 ー食事・運動・日光浴ー」
中村学園大学 栄養科学部 教授　津田　博子

「認知症の現状と予防について」
福岡大学病院 神経内科・健康管理科 助教　合馬　慎二

第2部 公開討論（来場者と講師の質疑応答）

問い合わせ 申込み先
福岡大学病院 庶務課
〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号
TEL 092-801-1011(代) FAX 092-862-8200(代)
E-mail:syomu@adm.fukuoka-u.ac.jp

【申込方法】電話 FAX E-mail にて ●氏名 ●住所 ●性別 ●年齢 ●電話番号 をお知らせ下さい。

※お知らせいただいた個人情報は適切に管理し、目的以外には使用しません。

後援／福岡市教育委員会

第9回 3大学合同シンポジウム

地下鉄七隈線沿線 福岡歯科大学 中村学園大学 福岡大学

◆日時／平成25年11月3日(日) 13：30～
◆場所／福岡大学病院 福大メディカルホール

テーマ 高齢化社会と健康 ー快適な生活を送るためにー

第1部 講演概要

「お口の老化とうまく付き合うために ーお口の老化の個人差を理解するー」

福岡歯科大学 咬合修復学講座 准教授 松浦 尚志

歯科の領域で加齢とともに起こる主要な2大現象は、歯の喪失と歯槽骨の減少です。歯を失った後はブリッジ、入れ歯あるいはインプラントによる治療が必要となりますが、もしそのまま放置しますと、咀嚼や見た目に困るということだけでなく、長期間の放置によって歯並びが乱れ、残った歯の喪失のスピードが加速されます。また、いざ治療をしようと思っても歯を作るスペースがなくなり、早く治療を受けていればしなくて済む余計な治療が必要となります。ところが、口の中の現象（患者固有の性質とその加齢変化）には大きな個人差が存在し、せっかくすぐ治療を受けても患者によっては治療後の経過が芳しくないことがあります。入れ歯を作ってもなかなか歯ぐきの痛みが取れなかったり、インプラント治療を受けてもその上の冠がすぐ壊れたり、治療後に顎が痛くなったりなどです。どこの歯科医院に行っても治らないような困難なケースでは、患者固有の要素（個体差）が大きく関与しています。本講演では、困難なケースの引き金となる種々の要素（個人差）を概説し、その中でも特に重要な要素である「無意識のかみ癖」によって起こる様々な病態とその対処法をお話しします。

「骨粗鬆症の正しい理解と予防 ー食事・運動・日光浴ー」

中村学園大学 栄養科学部 教授 津田 博子

骨粗鬆症は骨の強度が低下して脆くなり、ちょっとしたことで背骨、大腿骨、前腕骨などが折れ、骨折を繰り返すことにより立ち上がれなくなってしまう病気です。わが国では急速な高齢化に伴い、骨粗鬆症患者が年々増加しつつあり、現時点では1,300万人を超えると推測されています。骨粗鬆症は単なる骨の老化現象ではなく、骨の病的変化であり、骨折はその合併症ですので、適切な予防・治療が必要です。骨粗鬆症を予防するには、第一に、成長期に骨量を十分に増加させて高い骨量を獲得することです。次に、女性では閉経後急速に骨量が減少するので、骨量減少を早期にスクリーニングして骨量のさらなる減少を食い止めることです。さらに骨量がすでに著しく低下している高齢者では、骨量の維持とともに転倒を防止する必要があります。骨粗鬆症予防の三原則は、食生活の改善、運動の励行、日光浴ですが、薬物療法も重要です。今回の講演では、骨粗鬆症の概念についてご説明するとともに、具体的な予防法についてお話しします。

「認知症の現状と予防について」

福岡大学病院 神経内科・健康管理科 助教 合馬 慎二

高齢化社会を迎えた我が国では、認知症患者さんの数は増加の一途を辿り、現在65歳以上の認知症高齢者の数は462万人と推定されています。物忘れには年齢による物忘れと認知症による物忘れがあり、認知症の代表的な疾患であるアルツハイマー病をはじめ、血管性認知症やレビー小体型認知症などがあります。物忘れ外来では、問診や診察、画像検査などを行い、認知症の診断を行うと共に抗認知症薬による薬物療法と介護サービスや家族によるケアなどの非薬物療法を行っています。特にアルツハイマー病では病態解明や早期診断技術が進んでおり、新しい薬剤の出現で治療の選択肢が拡がっています。また物忘れはあるが認知症ではない状態は軽度認知障害（MCI）と呼ばれ、認知症の前段階とも言われています。この軽度認知障害（MCI）では栄養や運動、社会交流などによる認知症予防が有効です。認知症患者さんと家族、介護者の方がより良い生活を保てて本人が本人らしくあり続けることが出来るように医療、介護、行政などが連携して認知症予防と早期診断、早期治療を軸とした認知症医療に取り組んでいくことが重要です。